

管領斯波義將の奉書には彼等を『九州嗽訴輩』と書いて居る。合一と共に消滅した宮方・武家方の舊感情を以て武朝の心事を揣摩するは時世の轉變を閑却したもので、公正の論とはいはれまい。

結 語

これを要するに、本書の如く零碎なる史料を通して歴史の全局面を窺はふとせば、人に依つて其論斷を異にするを免れぬ。細心なる著者が妄斷を避ける爲めに多大の努力をなしたことは何人も充分にこれを看取することが出来る。殊に其編纂法は著者の卓抜なる技倆を示して居る。征西大將軍宮を中心として書かれた精緻にして且つ正確なる南北朝史は本書を以て第一位に置かねばならぬ。縦ひ自由研究の見地から視て、多少の將來の補訂に缺つべき點があらうとも、學海は著者の貢獻に向つて永久に感謝を拂はねばならぬ。

Chao Ju-kua, [趙汝适] his
Work on the Chinese and
Arab Trade in the 12th and
13th Centuries, entitled Chu-
fan-chi (諸蕃志)

文學博士 桑 原 隲 藏

一

『諸蕃志』は宋の宗室で、南宋時代に福建の提舉市舶使を勤めて居つた趙汝适の作である。藤田豊八君所藏の舊抄本『諸蕃志』には、趙汝适自身の序文があつて、その序文に据ると、この『諸蕃志』は理宗の寶慶元年(西曆一二二五)に作られたことがわかる。當時福建地方に於ける外國貿易が稀有の繁昌を極めたことは、近頃吾が輩が『史學雜誌』に掲げた論文中にも略記載して置いた。提舉市舶使として、この地方の外國貿易のことを管理した趙汝

・适は、その地位を利用して、往來の蕃商（外國商人）に問ひ質して、諸外國の風俗、物産等を記録したもの故、宋代の海外の事情を知るに屈竟の材料たること申す迄もない。

ヒルトは千八百九十六年の『英國亞細亞會雜誌』に『趙汝适』と題する論文を載せたが、その中に、この『諸蕃志』の價值に就いて、大要次の如き評を下して居る。

葡萄牙人が競争者として出現するまで、東洋の貿易は殆どアラブ人の獨占であつた。西はモロッコから東は日本朝鮮に至る間の大海原は全く彼等の繩張に屬した。さればこの時代に於ける航海の有様は勿論、南海沿岸の諸國民の風俗人情等に關する材料は、先づ第一にイスラム教徒の著書に求めねばならぬ。併しイスラム教徒の著書にも、幾多の缺點があるから、何れの國たるを問はず、この時代に關する新材料の發見さ

れるのは、歴史地理學上、尤も必要のことである。『諸蕃志』の記事には勿論アラブ人、波斯人、印度人その他の諸外國商人から聞き取つた受賣が多い。受賣は受賣としても、その記事の明瞭に且つ正確なることは、荒誕不稽の記事有り勝ちの當時の記録の間に在つて、一頭地を抜いて居る。要するに『諸蕃志』は南宋時代に東洋に來たイスラム教徒と通商上の關係の有つた諸國民のことを研究するに、尤も必要な材料と認めねばならぬ。

兎も角も此の如き貴重な材料がヒルトやロツクヒルの如き有力なる學者の手で、全部英譯せられ、且つ十分なる解釋を加へられたことは、實に學界の一大慶事と申すべきである。

二

『諸蕃志』は今より五六十年も以前から一部の東洋學者、殊に佛蘭西の東洋學者に知られ、又幾分利

用もされて居る。併し實際この書を廣く世界の學界に紹介したのはヒルトである。

ヒルトは千八百八十五年にその名著『大秦國全錄』China and the Roman Orientを公にしたが、その中に『諸蕃志』の大秦國に關する記事を譯載し、且つ著者の趙汝适に就いても、簡單な紹介を述べて居る。この『大秦國全錄』に『諸蕃志』を利用したのが動機となつて、ヒルトはその年から『諸蕃志』全部を譯出し且つ解釋する計畫に着手した。

かくてヒルトは千八百九十年に公にした『支那研究』Chinesische Studienの中に『諸蕃志』の内容及び趙汝适の經歷に就いて、可なり詳細な考證を載せ、更にその書の内容の一端を示さんが爲に、アフリカの弼琶囉^{ベルベラ}Barbara 國等に關する記事を譯出解釋して居る。

ついでヒルトは千八百九十四年の『通報』Young Paoの附録に『支那史料より觀たるイスラム諸國』

Die Länder des Islam nach chinesischen Quellen を、その翌年の『通報』には「趙汝适の記錄せるマラバル國」Das Reich Malabar nach Chao Ju-Kua といふ論文を掲げて居る。前者は『諸蕃志』所錄の大食國以下六七の回教諸國の記事を譯出して解釋を加へたもの、後者は同書の印度の南嚩國の記事を獨譯し且つ解釋したものである。

その翌千八百九十六年にヒルトは『英國亞細亞會雜誌』に「中世期地理研究の新史料、〔提供者〕趙汝适」Chao Ju-Kua, a new Source of Mediaeval Geography といふ論文を掲げて、『諸蕃志』の解題趙汝适の事蹟等を始め、イスラム教徒の東洋通商の狀況を主として支那史料によつて記述して居る更に同年の同雜誌に掲げた Chao Ju-Kua's Ethnography; Table of Contents and Extracts regarding Ceylon and India, and some Articles of Trade と題せる論文には、『諸蕃志』に收められてある四

十六國の大體の説明と、錫崙印度に關する記事及び諸外國の產物に解釋を加へて居る。尙ほこの外に一二『諸蕃志』に關するヒルトの論文が公にされて居るが、吾が輩は未だ寓目せぬから、こゝには述べぬ。その後ヒルトは暫く方向を換へて、匈奴突厥等所謂北狄種族の研究に身を委ねた様子で、

『諸蕃志』全部の公にされるのは何日のことかと危まれて居つたが、幸にロツクヒルといふ協力者を得て、こゝにその全譯が出版さるゝ事となつた。

ロツクヒルは米國の東洋學者で、一昨年(十一月)に中華民國の顧問として、支那渡航の途中布哇で病死した。彼は今より三十年前から書記官として後には公使として、北京の米國公使館に勤務したことがあつて、米國では有數の支那通である。早くから西藏佛教研究者として一家を成し、著述も中々多い。中にも千九百年に公にされた『ウイリアム・ルブルクの紀行』(The Journey of William Rubruck to the Eastern Parts of the World)など

は不朽の著述と思ふ。ロツクヒルはその晩年には支那中世の海上交通の研究に力を用ひた。ヒルトに力を協せて『諸蕃志』を譯出した外に、元の汪大淵の『島夷志略』明の馬觀の『瀛涯勝覽』等の研究にも手を着けた様である。兎に角ヒルトの相棒として尤も適當な學者である。

ヒルトが『諸蕃志』の翻譯に手を着けてから、實に二十七八年の年月を経て、千九百十二年の初に、ヒルトとロツクヒルの共著で、世に公にされた。その年月から推しても、將た著者の經歷から見ても、その内容の完美せることは想像に餘あると思ふ。四年前の出版で、最早わが學界が知れ渡つて居るが、まだ責任ある批評がない様であるから、吾が輩は後れ馳せの批評を試みようと思ふ、

三

この英譯『諸蕃志』は約三百頁の大冊であるが次の如く四部に別つことが出来る。

(一)主として支那の史料に據つて、古代から宋末

元初に至る迄の南海貿易の沿革を四十頁許に叙述

ある。

したもので、簡短ではあるが、極めて有益な論文である。先づ『諸蕃志』の出た南宋時代に至る迄の南海貿易の沿革を明にすることは、『諸蕃志』を了解するに尤も必要なことで、著者の用意親切といはねばならぬ。ユール Yule やリヒトホーフエン Richthofen を始め、海上交通のことを述べた學者も尠くないが、何れも支那の材料を十分に利用することが出来ぬ爲、不完全を免れない。ヒルトやロツクヒルは流石に有数の支那學者のことゝて、必要な支那の材料は悉く自家の藥籠中に收め、イスラム教徒の材料をも參考して居るから、僅々四十頁の論文も内容は極めて豊富である。東洋史に志ある者は誰人も一讀せなければならぬ。千九百十四年の通報に掲載した、ロツクヒルの『元代に於ける海上交通史』Notes on the Relations and Trade of China etc. はこの續篇と見るべきもので

ある。(二)は『諸蕃志』の上卷である。元來『諸蕃志』の本文は上下二卷にわかれて居る。上卷は志國とて、當時に知られた海上諸國の地理風俗等を記載してある。この志國の部即ち東は日本(倭國)朝鮮(新羅)から、西は西班牙(木蘭皮)エジプト(勿斯里)邊に至る迄の四十六國の記事を英譯して、之に綿密なる解釋を施して居る。趙汝适は主として當時の蕃商に聞いて『諸蕃志』を作つたのではあるが、往々彼以前に出た支那書籍の記事を無斷に引用してその中に書き込んである。南宋の周去非の『嶺外代答』を始め、『通典』とか『後漢書』等をその中に引用して居る。趙汝适のみでなく、支那人の著書には、一般にこの弊が多い。自分の直接見聞したことを、古書に記録してあることを明に區別せぬ。支那の書籍を利用するものは、この注意が肝要である。流石にヒルト及びロツクヒルはこの

用意を忘れずに、一々その本づく例を指摘してゐるのは、敬服の至りである。

(三)は『諸蕃志』の下巻の、志物の部を譯したものである。志物には當時貿易品として、海外より支那に輸入された、主要な物産四十三種程の性質產地等を記載してあつて、頗る有益な材料である。

ヒルトは久しく支那の税關に奉職して居つた關係から、かゝる問題の解釋には尤も適當な資格を有つて居ることは、その『大秦國全錄』を見ても、『支那研究』を見ても、若くば五六年前に出た『不明の拂菻國』The Mystery of Fulinを見ても明白である。彼はその該博なる智識を傾倒して、『諸蕃志』

所録の物産に十全なる解釋を加へて居る。歷代の正史はいはず、唐の段成式の『酉陽雜俎』、明の李自珍の『本草綱目』等の諸書に參考して、それら物産の支那に輸入された歴史の大略をも加へてある中々骨の折れたことゝ察せらるゝが、それだけ永

久的參考の價值がある。

(四)附録には地圖と索引とある。地圖は『諸蕃志』の記事の説明の爲め、特に作製したものである。索引はすべて四十餘頁もあつて、一般索引と、漢名索引とにわかれ、實に叮嚀を極めて居る。

四

批評よりも紹介が長くなり、紹介よりも賞讃が多くなり、所定の紙數も餘す所多からず、且つは吾が輩も全文精讀の暇もないこと故、茲に簡單に心付いた四五の缺點を申述べて、備を求むる意を表したい。

(一)『諸蕃志』の著者趙汝适はその姓によつても推測される如く、宋の宗室であるが、その血統は一寸判然し兼ねる。宋の太宗の後には皆二字名で、その頭字は世代 Generation の順に、(1)元(2)允(3)宗(4)仲(5)士(6)不(7)善(8)汝(9)崇等の字を取る規程であるから、趙汝适はその名の頭字より推して太宗八世の

孫に當ることがわかる。然るに『宋史』の宗室世系表を検すると、太宗の第四子商王元份の七世の孫に趙汝适がある。又太宗の第六子鎮王元懼の七世の孫にも同じく趙汝适がある。この兩人の何れが果して『諸蕃志』の作者であらう歟。

『四庫全書提要』卷七十一に『諸蕃志』の解題を掲げて、

「趙汝适」出於「商」簡王元份房。上距太宗八世耳。

といひ、又その百三十五卷に、宋の趙崇綸の『雞肋』の解題に、

作『諸蕃志』之趙汝适即其父也。

とある。宗室世系表によると、この趙崇綸は商王元份の裔であるから、兎に角乾隆の學者は商王元份の後なる趙汝适を以て、『諸蕃志』の著者と斷定したのであるが、その説の根據が不明である。吾が輩も未だ十分に調査はせぬが、たゞ『福建通志』

卷九十に泉州在職の歷代の提舉市舶使を開列した中に

趙汝适 商（恭靖）王元份裔孫。居鄞縣（浙江省寧波府）。慶元元年（西曆一一九五）進士。

とあるから、提舉市舶使として『諸蕃志』を作つた趙汝适は、乾隆の學者のいへる如く、商王元份の後なるべしと信じて居る。

英譯『諸蕃志』の序論（二五頁）に趙汝适のことも書き添へてあるが、極めて簡畧に過ぎて、此等の事實を一切注意しない。尤もヒルトは、『中世期地理研究の新史料（提供者）趙汝适』といふ論文の中に、幾分此等の事實に論及して居るが、やゝ曖昧である。

（二）本書の序論に支那古代の海上交通の歴史を述べてあるが、『前漢書』卷二十八下の地理志の終に在る南海交通に關する重要な記事を全く見落して居るのは、可なり大なる缺點である。こは既にべ

リ e Pelliot も指摘して居る。(西曆千九百十二年の『通報』四五七頁) 藤田(豐八)君が大正三年の十月及び十一月に互つて『藝文』に載せた「前漢に於ける西南海上交通の記録」といふ論文はこの記事の解釋である。

(三) 序論十頁から十四頁にかけて『唐書』地理志に引いてある唐の賈耽の廣州通海夷道を解釋して居るが、その解釋には賛成を表し難い所が多い。殊に波斯灣方面の地名に關しては、盛名ある著者としては随分の間違をして居る。賈耽の提颺國を或はアラブ地理學者のタイヅ Tabis に擬し、或はデイブル Daybul に擬し、決定に躊躇し居るが、吾が輩は提颺國は必ずデイブルたることを疑はぬ。『大唐西域記』の謝颺がヅアブル Zabul の音を表はし得ると同様に、提颺はデイブルの音を表はし得る筈と思ふ。印度河口の提颺國より始めて、提羅廬和國、烏刺國、末羅國を経て、縛達城に至る地名

の考證は悉く間違つて居る。吾が輩は次號の本誌に、此等諸國に就いて、新に考證を試みる豫定故こゝには故らに委細の批評を省略する。

(四) 序論十頁に、賈耽の廣州通海夷道は、イスラム教徒の慣用する航路に比較すると迂廻が多い。アラブ商人波斯商人等は支那商人の競争を避けん爲め、故らにこの迂廻航路を賈耽に傳へたのであると想像説を述べてあるが、これは疑はしい。イブン・コルダドベール Ibn Khordadbeh の『道程及州郡志』Le Livre Des Routes et des Provinces に所載の波斯支那間の航路はよく賈耽のそれと一致して居る。賈耽の航路を虚欺の航路など申すことは出来ぬ。

(五) 序論十八頁に宋時代に支那船は印度西海岸のマラバル地方まで出掛けたが、その以西へは航行せぬ。支那船は明時代に至る迄曾て印度以西へ航行した事實がないとの論斷には賛成出来ぬ。ヒル

トやロツクヒルは、唐代前後に於ける東西交通は皆西域人(印度人波斯人アラブ人等)の活躍より起つたもので、支那人は關係せぬ様に考へて居る。併しライノー Reinaut 譯の『支那印度物語』Reaution des Voyages de l'Asie Magoudi の『黄金の牧場』Les Prairies d'Or の記事を信用するならば、誰人と雖も、唐以前に於て、殊に唐時代に於て、支那船が波斯灣内に往來した事實を否定出来ぬ筈と思ふ。

(六)著者の如き支那學者も時に、出典の検討を誤つて、後世の書物を引用した場合がないでもない。遠洋航行の海船が、鳩を飼養して、海上より故郷に放ちて平安信を報ずることは、唐の李肇の『國史補』に見えて居るに、序論二十八頁には、唐末の段成式的『酉陽雜俎』を引いて居る。廣東滯留の蕃商蒲姓の事蹟は、南宋の岳珂の『桎史』に尤も早く尤も詳に載せてあるに、序論十六頁には、元代

の『東南記聞』を引いて居る。

(七)同時に又漢文を誤讀した場合もある。賈耽の『廣州通海夷道』の文に綠海東岸一行とある綠を綠と誤つて綠海 Green Sea と譯して居る。(十二頁)南宋の王象之の『輿地記勝』に

海山樓在城南極目千里爲登覽之勝

とある極目千里を極目千里と誤り、且つ之を地名と解して、Sited in a locality called Ki-mu-kan-と譯して居る。(二十九頁)また北宋の朱或の『萍洲可談』に

甲令海船大者數百人。小者百餘人。以巨商爲綱首副綱首雜事。市舶司給朱記。許用答治其徒。

とある、甲令の意味を丁解し兼ねて、

On large Kia-ling [甲令] Sea going Ships, と譯し、甲令を訶陵といふ地名と同一ならんといひ、更に甲令とは瓜哇、スマトラ地方に於ける外

國商人ならんといふて居るが、(二十頁)勿論何等の根據のない臆説に過ぎぬ。甲令又は令甲とは、當時の法令規程を指すので、單に甲令のみにて、實は甲令定むる所に據ればの意味である。

(八)二十六頁及び七十四頁に、南宋の周去非の『嶺外代答』の細蘭(Silan)を錫崙の名の支那の文獻に見えて居る最初である、その以前には師子國又は僧伽羅(Singhala)等と稱したと述べてあるが事實に合はぬ様である。周去非より四百餘年前に唐の杜環は、その『經行記』の中に、

師子國亦曰ニ新檀。又曰ニ婆羅門。即南天竺也。

とある新檀は即ちアラブ人の所謂セレンヂーブ Sereudyb のセレン又はシエラン Sielan の音譯である。B 又は L と D とは同じく舌音で、支那では混同し易い『通語津梁』に馬來語のデンカー Dengar の音譯に冷眼の字面を當てゝある。

(九)百十九頁に『諸蕃志』の

有番商曰施那幃。大食人也

を譯載してあるが、肝心の施那幃に對して何等の解釋を加へて居らぬ。吾が輩の見る所では、この施那幃はシーラーヴイ Shilavi の音譯で、シーラーフ Silaf 産の商人を指すのである。シーラーフは唐から宋にかけて、尤も榮繁を極めた貿易港である。シーラーフの商人は多く支那に通商した。シーラーフは、その土地ではシーラーヴ Shilav と發音する故、シーラーフの商人ならばシーラーヴイと呼ぶのが例である。

(十)百三十八頁に『諸蕃志』の弼斯囉國を波斯のバストラ Bactra に當てゝ居る。弼斯囉をバストラに當てたのはよいが、バストラの名は『諸蕃志』に外の支那の記録に傳はらぬとの注意は確に間違ひである。唐の賈耽の『皇華四達記』にチグリス Tigris 河口に近く、末羅國がある。この末羅國が即ちバストラである。『瀛環志略』に波斯灣のオルムズ Ormuz 港

に惡末の字を當てゝある。末の字がMEI又はそれに近きmasの音を表はし、末羅にてバストラの音を表はし得る筈である。

※ ※ ※ ※ ※

ヒルト及びロツクヒルの『諸蕃志』に就いてはペリヨが可なり綿密な批評を加へて、千九百十二年の『通報』に載せてあつて、參考すべき所が多い。吾が輩は成るべくペリヨの言及して居らぬ點に就いて批評した積りである。(三月七日)

柯劭忞の『新元史帖木兒傳』

文學博士 桑 原 隲 藏

一 清朝の學者は元史の研鑽に身を委ねた人が多い。これには種々の原因がある。

(二) 清朝は塞外から起つた關係上、華夷の區別を認めぬ。清朝に人となつた學者は、明時代の學者

の如く、遼、金、元の三代を夷狄として、極端に排斥せぬ。元の雄圖に對しても、十分の同情を有つて居る。

(二) 内外蒙古、天山南北兩路等の塞外の地は擧げて清朝の版圖に歸した結果、この方面の地理古蹟等が明瞭になり、元史研鑽の便宜を得ることが多い。

(三) 考證學といふ精緻な學風が開けると共に、學者の間に、歷代正史中尤も粗笨どの評を受けた『元史』を完備せんとする志望を生じて來た。

(四) 近年になつて、西洋や日本に於ける蒙古史研究の盛なることが、尠からず支那の學者に刺激を與へ、西洋や日本の學者から得た材料を利用して元史の缺陷を滿すことゝなつた。

此等が支那に於て、元史の研究の盛となつた重なる原因であらう。兎に角元史研究の開祖ともいふべき錢大昕以來、元史研究に手を着けた學者が中